

座間支援学校 学校運営協議会 議事録		開催日	令和7年2月28日（金）	
会議名	令和6年度 県立座間支援学校 第3回学校運営協議会			
開催方法	・書面 ・Teams ・散開 ・ 集合 ・その他（ ）			
時間	開始時間	9：45	終了時間	11：30
場所	会議室		人数	16人

1 校長あいさつ

お忙しい中おつまりいただきありがとうございます。三寒四温のなか確実に春が近づいてきております。校内では卒業式の練習も始まり、年度末の空気となっています。今回は1年間のまとめということで本校の取り組みをご報告します。分かりやすさのために説明が長くなることもあるかと思いますがご容赦ください。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

2 会長あいさつ

今年度は管理職が変わられて学校運営の大変さもあったかと察しますが、学校運営協議会についても工夫しながら運営をしてくださいました。昨年度後半に県教育委員会による学校運営協議会委員に対するオンラインの説明会がありました。この説明会のあり方と内容については個人的に意見書を提出しました。この制度や説明会の内容や実施法など、課題は少なくないと感じますが、その中で私たちは工夫して取り組んでいきたいと思います。

今日は会議の開始前に教職員の方々がとても親和的に談笑されていて、その関係性に感動しました。教職員の関係性は子どもたちに伝わるもので、とても大切なことだと思います。

今日の議題はきちんとやっているとしても時間内に終わらない内容ですが、ぜひ実のある協議をしていきたいと思いますのでご協力をお願いいたします。

3 学校評価部会

○学校評価年間評価について（副校長より）

- ・5つの視点についてどう評価するかを記入して完成となる。今日の協議でいただいた意見を学校関係者評価として取り入れて総括的なまとめとし、県にも提出、HPで公表する。また、会長と副会長に有識者としての第三者評価をいただくことになる。
- ・1年間の目標と校内評価（達成状況）を中心に資料を基に報告。

○各学部・分教室の取り組み報告について（各学部長・室長）

- ・パワーポイント資料を基に具体的に報告。

【小中学部】

- ・（委員）交流する中で本校の児童たちも貴重な学びとなっていてありがたい。今後広げていきたい。運動会に来ていただけたらと思ったが、土曜日開催であった。他にできることがあるか探してみたい。
- ・（委員）3つの学校の年間計画は共有されているのか？年間計画の共有によりもっと連携が進むと考え

られる。

- ・(委員) 以前より更に取り組みが進んでいると感じた。インクルーシブを考えた場合この3校の立地の環境はとても良い。この環境を生かしてインクルーシブ教育を進めていけることが理想。遊び等を共に行うことでお互いを知り合う。誰しも障害を持つ可能性がある。知り合っていくことにより「分かる」につながる。分断せず、いろいろな社会を知り合うことが大切なので、年間計画はぜひ共有していただきたい。就労については、企業の門戸は開いてきたと感じているが、重度の障害の方はまだまだ狭い。自立して生活ができる、人の手を借りて生活するために将来を見越した教育ができると良い。アメリカでは法律があるのでできている、という一面がある。日本ではまだ整備されていないが子どもたちへの思いはたくさんある。ICTの活用については、視線入力を活用も取り入れると「自分でできた」という経験ができる。
- ・(委員) 具体的な実践が積み重ねられていると感じた。生活の場面につなげていけることが大切にされている。先日、意思決定支援の研修を受けた。意思決定支援により、誰にでも気持ちを伝えられるということが確立できる。幼児期から意思表示をしてそれを受け取ってもらえるという経験を積み重ねることが成人の自立した生活につながる。学校生活に取り入れられていて素晴らしい。立地的に恵まれた環境を生かした交流について「無理なく」という視点は大事だと考える。ハードルを上げず、特別なことではない交流を重ねられるととても良い。
- ・(委員) 校内評価はどういったプロセスでまとめられたのか？
→中間評価と年間評価を各学部、分掌で行っている。かなりなボリュームとなるが、それをダイジェストとしてまとめている。多様な取り組みのほんの一部となっている。
- ・(委員) 校内評価に費やす教職員の方々のエネルギーと時間は甚大であり、そこに多くの労力を取られてしまっはあまり意味がないように思っている。座間支援学校の評価の在り方について検討していいると良い。学校評価が意味のあるもの、教員の意欲を引き出すものになると良い。意思表出支援は福祉、医療の場で大きく取り上げられている。県の福祉局によりガイドラインが示されている。教育、福祉、医療がうまくつながっていくべきである。
- ・(委員) 努力義務の扱いであるが、必須の取り組みとなっている。子どもの意思決定のガイドラインもできた。
- ・(委員) 医療面では生まれたときから意思決定ができる認知機能を育てようという動きが全国で進んでいる。
- ・(委員) 全国的にみると視線入力等の導入について神奈川県は遅れているようにも感じる。特別支援学校教員の全国的なグループやネットワークがあると認識している。
→今年度、神奈川県の肢体不自由教育部門がある特別支援学校9校と桐が丘特別支援学校との研究プロジェクトを進めてきた。帝京大学の金森先生と島根県立大学の教授に助言者になってもらい、12月26日に研究発表を行った。本校も視線入力の事例で発表をした。県内の教員同士でつながって事例の共有や課題改善に向けた取り組みをしている。→(委員) 金森教授のネットワークも活用して進めていただきたい。

【高等部】

- ・(委員) 場面緘黙の不登校の生徒の事例は、小中学校の児童生徒とも通じる。チームでの支援の大切さを学べた。認められる、誰かに必要とされる、安心していられる居場所があることが輝く子どもたちにつながることを実感した。地域と学校との双方向という関係性を視点到 win-win の関係、負担のない

取り組みを入谷小学校でも進めていきたい。業務改善には今年度時程の見直しを行い、子どもたちの遊び、学習を確保した上で削れるところを精選した。事務作業、教材研究の時間の確保の必要性を確認できた。先日出席した県の会議で花田教育長が昨年度は SSW と SC の配置、今年度はインクルーシブ教育、次年度は働き方改革に力点を置くと話されていた。県立学校では放課後の電話対応が大変とのこと。電話に録音機能をつけることでトーンダウンを狙うと聞いた。先生が元気でいられることが子どもたちの教育の向上につながる。

- ・(委員) 不登校生徒へのチーム支援は福祉の世界にも通じる。ご本人、ご家族が様々な人に関わってもらい成長したという経験を持つことができた。次に支援をする人たちにバトンを渡してつなげてほしい。ライフステージの変化で切れ目を生まないために、地域ではサポートブックの作成を行っており、保護者、教育、医療、福祉の資料を綴じ込んでいる。それが意思決定支援につながる。双方向という視点はとても大切。自分たちが何かをできたという実感は自己肯定感につながる。今後も双方向の実践へのチャレンジを続けてほしい。地域の方が講師となる取り組みは子どもたちをよく知る先生以外の人との関わりとしてとても良い経験となる。中学校への進学で子どもたちはとても苦労すると聞いており、中学校との連携はぜひ進めていただきたい。子どもへの支援、環境づくりを進めるためにも支援学校の実践を目にすることで中学校の先生方の気づきにつながる。有馬分教室の取り組みは子どもたちが自分で考えて発信したことを実現できると感じた。相模向陽館分教室の単元配列表を進路先にも渡してもらえると子どもたちの今までを知る貴重な資料となるのではないかな。業務改善は質を落とさずに負担を軽減していくことが大切。
- ・(委員) 我が子もずっと不登校だった。そのことで沢山の学びがあった。小さいときからの経験の積み重ね、背景は人それぞれ。ある程度の型はあってよいが、個別性が大切。成育歴が大きく関わってくる。温かい支援がたくさんあることが救いになる。事例のこの生徒がどう思っていたのか、どう受け止めたのかを振り返っていただき、登校できたから解決とせずには再発防止の視点も大切にできると良い。有馬分教室の取り組みは強みを伸ばす視点が陸上大会などで生かされたと感じる。才能が開花する可能性がある。弱みを自分で明確にできる子は社会に適応できる。相模向陽館分教室の単元配列表は生徒、教員の見通しとして有効。大学にはシラバスがあるが、一方通行の授業では分かっていないまま進んでしまう。本人たちがどこまでわかっているのか確認できるためにも、ディスカッション、アクティブラーニングを取り入れる必要があり、座間支援学校の実践からもヒントをいただきたい。
- ・(委員) 学校運営協議会委員と校内の先生方が話す機会があると良い。やり取りする機会があったら相互の学びとなるのではないかな。
- ・(委員) 特別支援学校の不登校は増加傾向にある。来ていない子、来ているけれど学校を楽しめていない子がいるのではないかな。不登校への対応事例については校内で共有すると良い。学校運営協議会委員は特別公務員であり守秘義務がある。パワーポイントの生徒の顔写真は出しても良いのではないかな。地域との双方向の学習については関わる機関自身が評価を行い、双方にとって意味があることを確認することが重要。そのことで継続性が生まれる。業務改善については時間の確保以外に先生たちが働きたい環境をつくる、メンタルヘルスの問題改善の視点も必要。メンタルヘルスの課題を学校としてどう考えるか、県教委にどう要請していくかも行ってほしい。

4 部会活動報告

○切れ目ない支援部会、防災部会より

- ・(委員) 脆弱な地盤であることを再認識した。災害時の備えを本当に考えていかなければと思う。連携

しながら進めていきたい。入谷小の子どもたちにもこの地域が田んぼであった昔の地図を見せると感じることがあるのでは。

- ・(委員) 液状化をすごく心配している。1 階、2 階それぞれへの避難を考えておけると良い。相模原市でサポートブックを作成したが続かない。高齢者でもやっているが個人情報の扱いがネックとなることもある。良い取り組みだとわかっているが実践は難しい。安心の基地づくりは大切。学校に行けていなくても、ひとり一人は関わってみるととてもユニークと感じる。
- ・(委員) 災害については、福祉でも災害時、災害後の準備を進めているが非常に難しい。どこまでどのようにやっていけば良いか悩むところであり、参考にさせていただきたい。災害が人災とならないために様々な準備をしていきたい。切れ目ない支援部会はリラックスした雰囲気の中個々の経験立場から様々な意見が交わされ学ぶところが大きかった。ぜひ続けていただきたい。
- ・(委員) 切れ目ない支援のために具体的な一歩を踏み出す、何かをすることが大切。学校が子どもの安心安全基地の「一つ」となるという考えで良いのでは。トヨタの社長が富士山のふもとに街づくりをしている。「永遠に完成しない街づくりを目指します」と言っている。学校も永遠に未完成。大人も子どもも「学校も」未完成として良いのではないかと思う。防災部会での取り組みをどう日常の学習に取り入れていくか、子どもが自分の身を自分で守る、主体的に関わるための学習をしていけると良い。防災委員会など、座間支援学校の子どもたちが主体的に考える機会をつくってはどうか。

(校長より)

活発なご意見ありがとうございました。我々が気付かない視点をたくさんいただき、今後参考にしていきたいと思います。一年間どうもありがとうございました。次年度については委員の皆様は一年間の任期となっており、改めて次年度ご連絡させていただきます。